

昭和二十年五月廿三日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十四年四月二十八日逓送検査特別取扱承認第三五二號
昭和二十七年七月廿五日印刷
昭和二十七年八月一日發行

第十八卷 第八號

浄土

八月號

大乘の歩み 眞野正順

原爆落下七年 木津義彰

戯曲 京の時雨 吉田絃二郎

父子 武田泰淳

猫の墓

一番末の娘が生れた時に貰った猫が、ずっと生きて、來年學校にあがるまでに成長したその娘と大の仲好しであつたのが、先日ふとしたことで、あつけなく死んでしまつた。年令にすれば満五才と何か月であるが、猫にしてみればもう相當の高齡、而も牡猫丈けに可成り肉體的に參つていたのだらう。

猫の死に對する子供達の關心は異常である。父親である私が死んでもああは騒ぐまいと思われる程である。一番上の小學四年の姉は、ためていたお小遣いを出してお花やらお墓を作ってくれた植木屋さんにお菓子やらを買うことにした。次の男の子は大切にしていたビー玉を五つも、猫の墓へ一緒に入れてやつた。猫と同年のちびちゃんは、何にもあげるものがないので、お墓の前で、幼稚園で習つた童謡を歌つてやつた。そして私に、何でもお經を上げてくれと、三人揃つてやつて來た。

片隅に造られた猫のお墓に、私はお經を上げた。そして極めて爽やかな心持ちに浸つた。澄明な空氣のように純粹な、子供達の哀惜の情に送られて、その生涯の幕を閉ぢた老猫こそ、全くのしあわせものだと思つた。

(竹中)

目次

大乘の歩み(2)……………眞野正順(1)

原爆……………長崎より……………木津義彰(12)
七年……………お父さんの死……………出口大賢(15)

サーマルの日本人村……………白井憲成(25)

佛教入門……………竹中信常(18)

父と子……………武田泰淳(5)

大佛様のお首……………佐藤密雄(22)

夏に思ふ……………佐藤良智(21)

信ずる強さ……………藤田寛海(23)

京の時雨(3)……………吉田絃二郎(30)



大乘の歩み (二)

眞野 正 順

我々にとつて、忘れんとして忘れがたい、あの昭和二

十年八月十五日。東京灣における降伏調印式の直後に、トルーマン大統領は、全米に向つて、こう放送しました。

『この勝利の日に當つて、我々は我々の執つた生活の仕方に對する信念と誇とを新らたにしたい』と。彼は、この大きな勝利の理由を、――想像せられる様に、武器の優秀とか、軍隊の勇氣とかに見ずに、自分等のとつて來た「生活の仕方」に見たのです。これは一見異様に響きますが、この眼のつけ所は、残念ながら、實は正しかつたのでありまして、かゝる生活の仕方、心の持方こそ、實は武器の優秀も國力の充實も、産み出してくる本當の根元であります。そして夫はやがて、この世界に對し、こ

の人生に對して我々の持つ心の態度に歸するのである。

實を云へば、一國の文化は、その表はれた外部の形象よりも、夫を生み出してくる内側の精神の方が遙かに、大切なのであります。こういう目に見えぬ内部の力が充實し來つてこそ、はじめて、外部の文化の花も開くのであります。内の精神が、いつかりして居なければ、いくら他所から立派な文化を借りて來ても、根の無い作り花のようなもので、時が経てば、みんな墮ちてしまふ。

一人の人としてさへ、今こゝに生命を受け、蒼々とした天を仰ぎ、茫々とした大地を顧み、この大いなる天地宇宙と、この小さな自分と如何なる關係にあるか。そこに、何か、いつかりとした確信を持ち、それに基づき、それ

に安んじて生きて行くのでなければ、本當の力ある生活は出て來ません。そうでなければ、畢竟夢の如く生れ、夢のごとく死んでゆく無自覺な鳥獸と同じであります。個人が然うであるように、社會だつてそうです。何か、いつかりとした精神の根を、その内部に持つているのでなければ、力強い成長は出來ない。それを「持たぬ民族」は「持つた民族」に、必ず壓倒され驅逐されてゆく。それが争ひ事のできぬ必然の命數であります。

現代の聖者と呼ばれ、いまアフリカの奥地で土民の爲にその半生を献げてゐるアルバート、シュワイツァーもこう言つております。『あらゆる人間の進歩は、その世界觀——世界の見方の進歩によるものだ。世界の見方が退化すれば、その人間は必ず退化する』と。即ち、この宇宙人生に對して、我々の持つ心の態度が、正しく且つ確信に満ちてゐる場合にのみ、文化の華は立派に咲き出るのでありまして、その心の態度が墮落すれば、必ずその社會や文化は退化するといふのです。

ところが、彼は更に一步進んで、こう云う世界觀は人の智慧から出てくる様に思はれてゐるが、實は智慧は末で、もつとその基にある心の態度——この宇宙人生に直

接に向きあつた時、じかに感ずる心の態度——信念の方が先きである。こう云う「信念」が現はれて色々な世界觀を畫き、やがて其上に美しい文化を形造つて行くのである。それならば、この信念は何かと云うと、それは「宗教」である。夫故、文化の根をだん／＼尋ねてゆけば、必ず宗教に辿りつく。西洋の文化には、西洋人の宗教が東洋の文化には東洋人の宗教が、その根を深く掘り下げて行けば、きつと宗教に打ち當たる」と。こう云う様な事を云つてゐます。これを一本の植木に譬へて見れば、文化はその花であり、宗教はその根でありましょう。宇宙に對する人間の信念が衰えてくれば、その文化は必ず衰えます。宇宙に對する人間の働きが文化であるからであります。

西洋の文化にしましても、其の底には、夫を生んだ深い精神的な態度即ち宗教が横はつております。この獨的な心の態度を基として、あの燦然たる科學文明は生れ出ばたかりでなく、これに依て其文明は維持せられ、それが屢々陥入り易い種々の弊害から免れ、あらゆる艱難の中に、常にその氣力を盛返して來たのです。

ところが、わが明治の文化は、この大切な根を忘れて

華だけ取つて我身を飾らうとした。こゝに、先きに申し
た大きな失敗があつたのです。花だけ取つて來た西洋文
明は、わすか百年の壽命を持ち得ずして崩れはじめた。

さて、それならば、我々はこゝで西洋人の宗教に改宗
したらいいのか。こゝに於て、吾々はハタと大きな壁に
ぶつかるとです。何故ならば、一つには、宗教といふも
のは、その性質からして、西洋の宗教は、あまりにも深
く、その國の生活、つまり、その歴史、風俗、習慣など
と、深く絡らみ合つていて、容易に夫れを解き放す事が
出来ません。是はあらゆる宗教の持つてゐる一つの性質
であります。それで、我々が西洋の宗教を採用して行か
うとすると、結局は、夫に絡みついてゐる西洋人の風俗
や習慣なども一緒に採り入れて行かねばならなくなる。
理屈ではそうでなくてもいゝ筈なのですが、事實本當に
其の宗教の心に成り切る爲には、やはり色々多くそう
云ふものを採入れて行かねばならぬ。是は大衆にとつて
堪えられぬ處であります。夫れで、この信仰者は、出來
て來ましても、何時も社會の少數者に止る、——將來と
ても少數者に止る運命をもつてゐるのであります。

それだけでない。今申した様に、宗教は歴史を通じて

その社會のさま／＼の部面に限なく滲み渡つております
から、私共の今の社會にあるいろ／＼な良い所なども、
その出來て來た源をだん／＼溯つて行くと、終いにはキ
ット今迄の宗教に歸つて來ます。ところが今、この根底
の宗教を急に切斷して、外のものに乘換へてしまふと、
丁度、植木の根が切捨てられたと同様にその社會の今迄
の善い所は、その育つて來た根源を失ひ、宙に浮上つた
様になる。それでどうも自分達の社會に對しても、本當
に、自分達の奥の方から芽が生へて育つて來た、「本物」
といふ自信が持てなくなつてくる。そして社會が妙に上
ついてしまふ。

所詮、西洋の文化をその宗教と共に移植する事は、簡單
なやうで仲々困難な事であります。同じ事ならば、我々
が今日迄親しんで來た歴史の中から、かゝる西洋文化を
擔ふに足る立派な宗教を見出す事は出來ないだらうか。

勿論、我々にも、わが民族固有の宗教が無いといふ譯
ではありません。歴史の永い間、傳はつて來た神々の祭
には、今もなほ、我々は深い親しみを感じています。然
し御承知のようにこれはまた、餘りにも日本的でありま
して、残念ながら廣い世界性に於て缺けておる所があり

ます。今日の日本は、もはやこの狭い島國に於てのみ生きる事はできません。いま私共に要求される最大の事はひろく世界的に生きる事であります。經濟的存立のためにも文化向上の爲にも、我々の將來を開く第一條件は、ひたすら廣く世界的に生きる事であります。従つてその宗教にしましてもまた、かゝる世界的躍進を裏づけ、推進するものでなければなりません。今迄とても世界的躍進はしばしば語られて來ました。然し夫は多くわが日本の爲めに世界を使つて行かうとする心でありまして、その本性を尋ねれば、結局は狭くこの日本の上に立つていたのであります。こゝにふ心持では、決して眞に、世界において生き、世界に受け入れられてゆく事は出来ません。眞に世界に生きる爲には、今迄の心の持ち方を逆にヒツクリ返し、この島國の爲めに世界を用ゆるのではなく、世界のためにこの日本を用ゆる、——すなわち平等なる眼を開いて、廣く人類の進歩と幸福とを熱求し、その爲に、自己を寄與し、己れを獻げてゆく心、その博々とした「世界心」でなければなりません。かゝる心を我々が用意され得るかどうか。こゝに我々の將來にかゝつていると云つて過言ではありません。

さて、それならかゝる大いなる「世界心」を與へ得る宗教は、果して我々に有るのでありましようか。わが民族の歴史傳承の中に生き來つたところの宗教であつて、然もこの島國民族の狭い見地に滯らず、却つて夫れを博大な世界心へと、引上げくして來たつた宗教は無かつたのであるか。そして遠い海の彼方の世界の人々までもその博い信仰の中に於て、差別なき兄弟となり、共に手を握る世界的宗教は無かつたのであるか。

私は強く斷言したい。それは既にこゝに存しておりまゝす。それは既に久しく我々の歴史の中にあつて、絶えずこの國の人々の心を高邁なる世界精神へと引上げ、こゝに香り高き數々の文化を生んだ精神的根源であつたばかりでなく、二千余年アジア大陸を西より東へと大きく流れて、その及ぶところの總ゆる民族、それらゝの文化の母となり精神の基盤となり來つた、所謂東洋文化の共通の根。その超國家的な精神的結帯が、こゝに存しております。

夫は何であるか。即ち大乘佛教であります。今やこの時局に際して、我々は改めて、その眞の姿と意味とを見極めることが、必要となつて來たと思ふのであります。(續)

父子の情



武田泰淳

想ひかへしても、嚴父の感は全くない。慈父と言ふべきであらうが、慈父であるぞよと自己の存在を主張する人物ではなかつた。息子にとつては、まことにくみしやすき相手、世界中で一番危険性のない年長者である。

幼童のころ兄に鉄をぶつけたこらしめのため、父は私の足首をつかんで、井戸の上へ吊るさげた。もちろん悲鳴をあげたが、さほどの恐怖はおぼえなかつた。「ともかくこの人は自分を可愛がつてゐる。何をやつても許してくれる。このひとが生きてゐるかぎり、心配はない」また大體そのやうに感得してゐたからであらう。

(5)
中學に入つて約二年、英語と漢文を夕食後みっちり學習させた。講義はきはめて丁寧で、聽いてゐると學力が増進して行くのが、少年にもよくわかつた。漢文は十八史略、英語はリイダアの豫習。父子ともにその二時間、

他の家族には祕密の楽しさを味はつた。それ以後、父は何を讀め、何を勉強せよと指導したことはない。まるで指導するのを恥しがるやうな放任主義で終始した。

本郷の潮泉寺は家屋が古く、傾きかけた部分もあつた。豪雨の夜は、洗面器、バケツ、盥などの運搬でいそがしい。幼少の私は雨が降ればどこの家でもさうやるものと心得てゐた。檀家からの掛金集めで、父は非常な努力をしたが、建築を開始する直前に目黒に移つた。目黒でも、長泉院ひきつぎの借金に苦しめられ、土木業者や土地の顔役などともむづかしい談判をつづけた。ここでは前住職の本堂再建が失敗したあとで、穴埋めするのがやつとで、つひに父は建築にとりかかることなく終つた。家を建てる者と家を我慢する者、この二つのタイプありとすれば、父は明らかに後者である。

父の記録した「長泉院移轉始末」には次の如き一文があつて、不孝なる息子を反省させるに充分である。

——もし予にして之(住職就任の件)を拒絶せんか法類中に之に當る人物なく勢ひ法類外の人に委せざるをえざるも、之は法類として忍びざる所なるのみならず、檀徒の間にも異論ありて幾多の紛擾を惹起して長泉院の存

立を危うする惧なしとせざるものあり。仍て斷然之を引受けの決心をなすに至りしものなり」

——實際在住して寺務を見るに前住の稱する如き収入を見ず、月々の地代家賃は金利にすら足らざることあり。之に加うるに堂宇の建築事業の厄介なる問題ありて、之が解決を見て生活の安定を得るの日の何時來るやも知れがたし。不安を感じれば殆ど寢食も能はざる状態なるも、如來願命の然らしむる所として聊か慰むるのみ」

當時(昭和五年以後數年)、息子の方は非合法運動にひつかかつて捕吏のせまる所となり、狼狽憔悴、はなはだ醜態をきはめてゐて、父の苦衷を察したことがない。警察署の樓上に於て、面會の父と理論鬭争もしかねまじき勢ひであつた。父は白きハンケチをズボンのポケットよりひき出し、無言で拘留中の子に手わたした。子は鼻をわづらつて、絶えず多量の鼻汁を流してゐたからである。怒罵もせず、泣き落しもせず、父は子が大學中途退學を決した日、ヘエゲル全集を子の机上に贈つた。

父は農耕を好んで、本堂の敷地を開墾した。子も理論上、働かざるものは食ふべからずであるから、鎌を振り鍬を使つたが、たうてい父の敵ではない。畦のうねを切る、もつこをかつぐ、野菜棚を組む、一々こまかい命令の下に立ち働く。農作は數年の計で連作はよろしくない

から、父は作物の地圖までつくつて手順よく仕事をすめる。子の方はむやみと力を出しては、すぐへたばる。父は大地と植物によつて、あつかひにくい子を教育したと言ふべきだ。「いそいではいけない。無理をしてはいけない」息を切らせた息子に向ひ、父は呟くやうに笑つて言つた。

父は宗教めいた訓話を家族にしたことがない。子が猖紅熱で四十度以上の高熱が一週間つづき、生死の境をさまよつたことがある。外道の子には佛の來迎が見えなかつたか、「魔物が來て連れ去らうとする」とうわごとを發する。すると父は農村出身者らしい厚みのある掌を子の額にあてがひ「ナムアマミダブツと申せ」と申渡した。そして熱は急降下した。

父はひそかに子を想ふ情を記録してゐる。「後住に關する希望」と稱する遺言めいたものもある。

——當住(父)萬一の後、當寺後住には、

第一、武田泰淳

同人は志操動搖し居るも、もし堅く轉向を誓ひ専心佛祖に奉事するに至りたる時は余が後を襲はしめられたし。云々」

空襲はげしき頃、父母は難を福島縣若松市に避けた。その日記の一節。

——六月廿七日(水) 晴 平穩 溫度上る。午前午後、野菜の手入少し。

泰淳より特急にて書面來る。(當時子は上海に在つた)。日附三月六日とあるも三月十日大空襲の事を知る由を記せるを見るに四月か五月か六月の書通りかも知れず。とにかく無事元氣、佛典に親しみ度由を記するを見れば彼にも佛種開發の端と見るべきか。願くば此傾向の順調に進行せんことを。」

疎開先でも農耕は休まなかつた。

——八月十一日(土) 快晴 室内は涼爽なるも戶外は炎暑劇。午前は寺の墓掃除、少睡。午後、草履作り一足に二時間を費す。ややその骨を覺えたるが如し。寺の長男と南瓜を算へ廻る。全體九十有餘ありと云ふ。二百の豫算には遠く及ばなかつたが、初めての土地にして先づ先づ成功と云ふべし」とある。

疎開中、(二十二年三月廿七日より八月廿八日に至る間)「會津詠草」千句をつくつた。父の句はさらりと何の技巧も飾りもない。日記、心おぼえのつもりであつて、「俺は人に好かれようとは思はない」といふ心情そのものである。

晚餐は豆づくしなり味噌捏ね日

麥に雀、芋に盗人如何にせん

梅雨に濡れ梅實を採るなり大和尚

なかなかユウモアのある句もまじつてゐる。

俳號は空方。酒煙草をたしなまず「食う方」也の意である。又、よくあぐらの臀の片側を傾けて放屁したから空砲の意に通じてゐる。だがつくづくおもひみるに父の俳號空方は、よくその性格を物語つてゐる。

父は巢鴨の大正大學の學部長を勤めた。専門は宗教學である。大正大學は淨土、眞言、天台の三宗派が合同して建設した私立大學である。淨土宗はナムアミダブツの稱名がたてまへ。眞言は密教で、印を結んだり、ゴマを焚いたりする。天台宗には東京では淺草の觀音さまがある。淨土一宗でまかなつてゐた宗教大學に、別の二派が加はつて擴張した大學であるから、教授陣の割りふりその他、むづかしい行政上の問題が多い。

父と同年輩の淨土宗僧侶には秀才が多い。彼等は、官立大學の教授になり、洋行し、文學博士の稱號をとり、或は代議士として、或は社會局長として、著名人となつた。父は宗門大學から三派合同大學へと、月給のやすい私立大學の一教師として、黙々と宗門人を教育した。父が卒業生に書きあたへる扇面の句は、ただ一つ。「言行一致、表裏相應」であつた。口下手の上に、文章を發表するのが何より嫌ひ。父からもらふ葉書は右はしに數行

の走り書きで、紙面の大半は空白であつた。たつた一行のペン文字を記した、電報のやうな葉書もある。

「俺は百姓でもやつてゐればよかつた」といふ述懐は、つきあひを極端に好まなかつたがためである。寺に客がある、たちまちイライラする。およそぶつきら棒のお經を讀んだ。聲を張りあげ、美聲を聽かせる算段などなかつた。浪花節そつくりの造り聲を苦心してしぼり出す僧侶もゐるが、父のは全くの無技巧、ともかくもまずいものであつた。

昭和廿五年新春の日記

——一月一日氷雨、寒強し。泰淳外出。これだけが記してある。別に「みぞれして芝にも行かず寝正月」ほか俳句が十句。「芝にも行かず」とは、毎年芝の増上寺で年賀のつどひのある、それに参加できなかつた遺憾を示す。

「泰淳外出」の一事は、その度ごとに父の日記に記録されてある。「外出」はすなはち「外泊」である。廿一年上海より歸國後、原稿が賣れ出してからの私は寺に居つかなくなつた。讀經、地代の集金、その他父に代つて果さねばならぬ事務一切をことわつて、香ばしからぬ所業にふけつた。父母には祕密の女性關係もあり「外出」しては、仕事部屋と稱する巷の部屋々々を轉々とした。

「明日の日を思ひ廻せば苦しくて今日一日も安きことな

し」。「愛し子や好き兄弟はらからの死を想ひ生きて残れる吾は哀れか。」七草に詠んだ歌の悲觀的なのは、次男の「志操動搖」とも關係する所多いであらう。長男は東大農學部教授として一家を構へてゐるが、寺を讓るべき次男は素行をさまらず、混沌状態にある。

大島泰信の次男たる私が武田姓を名のつたのは、父の師僧武田芳淳氏の姓を繼いだからである。師僧の恩を忘れたかつた父であるから、次男の外道への轉落は一段と悲しかつたにちがひない。

高校生時代（當時は私も自分流に宗教問題を考へあぐねてゐた）。私は父と教理問答じみた會話を交したことがある。

「法然上人が、ナムアミダブツを想ひついたのは、無知文盲の民衆を救ひたからでせう」

「うん、さうだ」想ひがけぬ生まじめな質問に、父は満足の瞳をかがやかす。

「ナムアミダブツは簡單で誰にでもきるから、それを發明した法然は僕は偉いと思ふ。だけどそれぞれで救へるのは日本人だけでせう。南洋の土人はこれで救へますか」

「うん、それはな」また息子のへりくつがと苦笑しながらも、父は辛抱よく沈思してゐた。おつかぶせて雄辯

を振はうとはせず、只「そこがむづかしい所だよ」と答へた。次男の回心を切に祈つてゐる父は、このチャンスに浄土宗の教義を大々的に説明し、一舉に迷ひを粉碎すべきだつたかも知れぬ。しかし父は、困つたやうな悲しいやうな素朴な表情を息子の前にさらし、さかしらの言辭を弄しなかつた。今の私には、その瞬間の父の正直な態度が、千萬言の説教より尊い物に思はれる。空方の俳號の父にふさわしい所以である。

——昭和廿五年二月十二日、晴、寒氣強し。午前、麥、葱に施肥。

雪踏んで麥の肥こやしや喜字の翁

まだら雪麥と一緒に踏む翁おきな

雪ふんで糞まきちらす麥島

二月十二日は次男の誕生である。その日も彼は父のもとへ歸らなかつた。

その頃からますます簡略になつた父の日記は、ほとんど次男の外出と歸宅でもちきりである。

「魚を煮、刺身をつくり、泰淳も歸宅、一同會食」

「晩方、泰淳も歸宅、賑かに晚餐」

「夕方、泰淳信州より速達」

「泰淳の所得税、追加納入」

「淳、夜歸」

「七時半、淳に送られ出立、尾張に向ふ」

「泰淳、登記所へ資格證明をもらひに行く。十一日にならなければ出来ぬとのこと。(中略)泰淳外泊」

「泰淳、箱根へ遠足」

「八月一日(火)雨、十時頃より晴。朝鈴木來り、昨日ツル(母)秋葉原驛乗替に轉倒、足に怪我し、Sにて醫師を迎へ治療を受け、ために二三日歸宅不可能と申來る。午後泰淳出かけ、歸途Sに立寄ると申したるも外泊して歸らず」

「二日(水)晴。泰淳午後歸宅、ツル負傷、兩膝骨、稍良し」

「午後、淳出かけり」

「七日(月)朝晴、十時頃雨、午後、淳Sへ行き自動車にてツルを連れ歸る」

老父を一向になぐさめぬ次男の態度は、親戚の人々の暗に非難する所となつた。

昭和廿七年二月より父は病臥、食慾を減じた。肉食を喜ぶ翁のために、歸宅のさいはかならず牛肉、ハム、うなぎ、燒賣シウマイの類を持參するのがならはしであるが、それも箸をすぐ置いて大息するやうになつた。原稿料の一部を毎月、父に呈上するのは、無上の楽しみであつた。さうか、有難う。ではもらつておこよう」四疊半の一定の場

所に端坐して、禮を言ふ。子供のやうな、むき出しの喜び方をする。その四疊半に坐ることがもはや困難である。

私の所へ寄贈されてくる雑誌の類は、ほとんど父が眼をとほす。熟讀しては一つ一つの作品を批評した。朱筆を入れて、字句の誤りを訂正したりした。「こんなこと書いて、原稿料もらふなんて、ふとい奴」などと、手きびしい言も吐いた。廿七年に入るや、その唯一の娛樂をピタリとやめた。私は危險を感じずにはゐられなかつた。

長兄と次男が交替で、看護のため寺へ泊りに行く。母と女中が熱心に立ち働くから、さしたる用事もない。病人の精神を安定させるのが目的である。四疊半の父の坐る場所に、私が替つて坐つた。母が臥床してから、そこで私が夜業する。注射のためしばしば尿意をもよほす父が、夜半に鈴を鳴す。すると私は炬燵から起つて、隣室へ行く。掛蒲團をすらしして、父の股間に便器をあてがふ。ごく少量の液體がガラス器にチョロ／＼と流れ入る。私が父の陰莖を掌にしたのは、それがはじめてである。皺のよつた陰莖はいかにも力なく首うなだれ、尿びんの口からはすれさうになる。病人のラッセルがゼイ／＼と苦しげに聽え、尿は想ひ出したやうに又チョロ／＼と音をたてる。

父は身體を横向きにし、兩脚をちぢかめ、いかにもすまなさうな顔つきをする。病人の權利を主張する面持は全く見えない。尿びんの蓋をしめ、蒲團をもとへもどし便所へ行つて尿を棄て、尿びんを洗つてから新聞紙にくるんで父の枕もとに置く。

さて再び炬燵に向つて執筆にとりかかるが、おやぢを感じ心させ満足をさせる小説は一生書けさうにないなと、私は口惜しくなる。

死に目にはつひに會へなかつた。やや快方に向ひ、夕食後、炬燵の傍らで倒れた。疲れるとゴロリと横になるそのやり方で靜かに倒れた。顔面の紅潮がはげしいので長兄が抱き起したときはすでに意識不明であつた。「チチシスハハ」の電報を受領すると、女房は「大丈夫よ、ね大丈夫よ」と、しきりに私をはげました。

父の死後、母はまず「さつちやん（私の幼名は覺）がお寺をやつてくれると一番いいんだけど」と、後任住職の相談を私に持ちかけた。「名前だけ附けておいてくれればいいんだけど。あとは御所化^{おしよけ}さんを置いて寺役をやらせるから」

「僕はダメだよ。僕はテラのテの字も厭なんだから」「さうかねえ。あんなの氣持はよくわかつてるから、無理には言へないけど」と母は淋しげにあきらめた。息子

の世話になり、息子の嫁たちにめんだうを掛けたくない。それだけが母の本心であつた。

初七日に、女房子供を寫眞で母に紹介した。友人の話などで、父もまだ見ぬ嫁の存在することは承知してゐた。「お前も子供をこしらへたか。その方がいいよ」と言つたのが往生の五日前である。

父の葬儀が春の彼岸中に、とり行はれたのは、父の残した唯一の皮肉のやうな氣がする。彼岸は寺のかき入れどきで、坊さんはオール多忙である。他人には迷惑をかけられどほし、自分ではつひぞ迷惑をかけなかつた父は自己の葬儀によつて、仲間の僧侶たちを迷惑がらせたのである。

彼岸の中日は火葬場は休業、とも引きの日も定期の休日である。そのため火葬が伸びて、坊さんたちは何日も通夜をいとまねばならなかつた。しかも雨天がつづいた。

納棺のさい順に生花を投げ入れてゐた孫娘たちと女中は、棺をはなれると、めい／＼兩掌を顔にあてがひ、泣きながら廊下を歩いた。屍の顔面が黒く變色して、ふくれあがつてゐたからである。無知な彼女たちの方が、インテリの私より、すなほに老父を愛してゐたのかも知れぬ。

本葬の日も豪雨。増上寺の大僧正（このひとが生存す

る無二の親友だつた）が引導のため起立すると、電光一閃、猛々しい雷鳴が本堂を襲つた。雷鳴はただ一聲、本堂をめぐる池畔の緑樹ごとく蒼白く輝いて、突風は僧正の緋衣と白い幟や紫の幕をそよがせた。「みんながたゐるんでゐるから、おやじさん、喝を入れてくれたんだ」と、弟子の一人が私に言つた。私は自分がたゐるんでゐるかぎり、その言葉を肯定せざるを得なかつた。

四十九日の法事の席で、私は法類總代として挨拶した。「故住職の遺言によれば、長泉院の後任は武田泰淳あるひはWとなつて居ります。私は出家としてはさして恥づべき行爲もして居りませんつもりですが、住職としては最も不適任であります。住職は寺を守る者であり、圓滿な人格者でなければならぬ。子として父の遺志に、そむくことは不幸のやうであります。住職となつて寺を破るより、住職とならぬ方が私としては、孝行と考へます。云々」

無慾の空方なら、悲しみに沈んで、こんな大みえ切つた挨拶はしなかつたであらう。私は、佛教の徹底したニヒリズムには感嘆してゐる。佛教の根本精神は出家にある。家を出て、精神の大海を漂泊することだ。今だに借間を轉々とする私は、その意味で（こじつければ）多少佛教的でないこともない。

七年落下爆原

— 長崎より —

木津義彰

悪夢、それは此の世の中で何にもたとへられないむごたらしい悪夢であつた。此の世にこの程の限りなく悲しい現実があるものであらうか。私は地獄を見た。幽霊も見た。はつきりと此の眼で見た。いや私自身地獄に突き墮されてゐたのだ。私自身が幽霊だつたのだ。精魂つき果てゝ過去のすべてと未來のすべてを闇の渦きの中にもぎ取られてしまひ、ちよろちよると憐の燃えるほどのうす明さに、わずかにのこつた救ひを求める本能だけで歩いた。

あれから、はや七年経つたのか。こゝ長崎の稻佐、風頭、烽火、金比羅、岩屋の山々は依然として美しい緑りを湛えてゐる。七年前の全山焼けたゞれた赤黒い山肌の荒寥たる姿は、今近く寄つて灌木だけの樹林だと氣付かなければ知り得ない。人々の姿も亦さう見える。會つて挨拶してゐるうちに相手のシャツの襟に見る首すじに、袖口に氣付く手の甲に裾に出た足首に私どもははつとする。悪魔の爪が鋭く掻き切つたあとがた、この引きつゝた創跡が生々しく示してゐるからだ。昭和二十年八月九日午前十一時五分の一瞬の閃光が展開した地獄變。その人は語らずとも如實に歩いて來た血みどろ道の驗しさを示してゐる

のだ。肉體的には世のある限りの破壊されてゆく苦痛と、精神的には絶望と怨嗟とそして寂寞とを。

江戸、長崎と呼びなじまれた長崎のまち、鎖國の窓と云はれ、西洋文化の攝取にひたむきな純情を示してその據點となつたこの長崎に西洋は原爆を落した。いや戦争の悪魔的嗜虐性は二十世紀の科學をかう使つた。人類がかもし出してゆく慾望の醜惡な集積は遂に文明の劇薬をうち浴せてしまつた。狂亂したその手で世にあるまじき破壊と凡そ非文明的な虐殺をこの地上、長崎で敢てしたのだ。

嗚呼、原子力、そして人類の運命、人類に原子力がどれ程強烈な影響を與へるのか、世界の物理學者はその立場で充分な研究検討をして來、また續けることであらう。だが既に問題の大半は物理學の領域を出、ゆくところまた科學のみの分野をも越える。人類の意志といふ舞臺に演出される原子力劇。日本の廣島と此の長崎の上空に三日間の場齣とを置いて炸裂した原爆による開幕は果してフィナーレ、光にみちた淨土かはたまた陰惨な地獄道か。原作、脚色、演出、演技——更にこまかく舞臺道具、照明、衣裳、音樂とこの人類の運命劇の夫々の擔當者。その一人一人の意志

ところからの在りやうとそのすべての綜合された在りやうがきびしくも形成してゆくし、之を靜かに見まもる観客席の一人一人の身につきました批評が劇そのものを運命の眞只中に決定的に方向づけ導いてゆく。悲劇に昏れるか、喜劇に明けるか、誰も知らないこの舞臺上の流れである。だが誰一人拱手 傍觀して居られよう、又それが許されよう。たとへ、舞臺に上つて所作ことは叶はずとも、又觀覽席の椅子に坐すことすら出來ずとも、せめて人間の心の奥からつぶやき、又叫ぶその口を誰が緘し得よう。せめて悲劇としての幕落ちに終末づけてもらいたくないといふ悲願をいだきつゞけることだけはすべての人に許されていゝ筈だ。父母と妹とそして己れの片目を原爆に失つて伯父に引きとられた今年十四になる少年は讀經の終つた私をまともに見つめてかう云つた。

「『ノーモアヒロシマ、ピースフロムナガサキ』と西洋人も日本人も云ひながら、あちらには百個位在る、こちらには千個も在ると原子爆彈の研究、製造の競争がつゞけられてゐるのはどういふことなのでせう？」

素朴なこの問ひに、不可解な世界に住む大人達は何と答へることが出来るのだ。その問ひ

と抗議とが純粹なものであればある程、答へる術に迷ひ當惑してしまふ。何といふさびしさであらう。わびしさであらう。だがそんなことゝは關係もない様に舞臺の上ではうす明りの照明——それは昏れか暗か知らない——の下に燕尾服と軍服が出たり入つたり、不氣味な小太鼓の音がゆるく、また時にはげしく響いてくる。あゝこの世界の現實から淨土は餘りにも程遠い十萬億土の永遠の憧れにすぎないのであらうか。

「戦争、平和、原爆」といふ一連のテーマ。私たちは全人類に原爆地獄繪圖の話をしなければならぬ。だが人々は繪で見、話で聞いてその極苦を信じてもらへてもあの時のすさまじい衝動とたぐひない恐怖は云へば云ふ程誇張としか感じないだらう。それが恐ろしいのだ。人間が最後にのこつた魂を失つた姿、而も一人や二人でない何萬といふ人間達は群れになつて、ずた／＼にやけ、裂かれ、たゞれ臭を放ちながらよた／＼と歩いてゐる。立つ力も救ひを呼ぶ力もなくうごめいてゐる。うつろな眼だけが時々動いてわずかに死の穴へおちこみつゝ生きてゐることがわかる。思考と意志の一切が空白になり、屍體に近い體にとまりつく蠅と蛆のむれ——そして

野も川も山も次々に屍體が蔽はれてゆく。三萬に近い人々がさうして死んで行つた。閃光の悪魔放射能は更にのちまで原子病で半年後一年後二年三年……と生體を腐らせたゞらせてゆくむごたらしい殺戮者なのだ。今も尙原子病のため抜けてゆく髪の毛を手にとりつゝ、懊惱し呻吟する人々のことを世の人は知つてゐるであらうか。

あれから七年経つたのか。浦上の原子野も歩けば見える様だ、聞こえる様だ。長崎は國會より國際文化都市と指定され、平和への決意をこめて立ち上り、悲業の爆死者の聲なき切なる悲願の聲を文化都市への正精進を以て弔ひ回向せんとしてゐる。

私は、もはや書きつづけるに耐えない地獄と幽霊の圖を次の遺された一連の歌の中に聴かう。之は歌友陣内馬三郎氏のものである。彼は三菱長崎精機所の員で被爆後、原子病、治癒かと思えたが再發二十二年五月三十一日逝去した。

閃光一瞬にして崩壞の梁に片足をうち敷かれたり

いちはやく逃れ出でたるをとめひとりわが方脚をひき出さむとす

遂にわれ下敷かれたる右の足ねじり抜きたりこの血潮はや

燃ゆる火のほなかゆ起る叫び聲傍觀のほかなかりけるかも

辿りつきし横穴壕にひしめける血の顔貌の皆ふくれたり

山方につなみのごとく寄せ来る女男ことごとく血にまみれたり

全身火傷の裸形おりこの眞夏日にうちふるへつゝ

ふき散れる蒲團の綿を奪ひ合ふ皮膚脱落の身を蔽はむため

をとめ子はんぼちや一つ探し來て芋蔓かぶせ枕させたり

學徒來て擔架にのれといひしかばあなありがたくにじり寄りたり

亂暴の極み萬象くつがへり焼けたゞれゆく長崎の空よ

水を欲る聲ぞあはれにきこえつゝ山の畑に生けりともなし

家にありし妻子のいのちいかならむ丘一つむかふに焰みゆるを

動員の工場休みて家にゐし恙ある子よ生きてあれかし

所詮生きてあらざらむと思へども人影すれ

ば心動くを

妻子らの生死さぐるとかへり來つ既に拾ひし骨示されぬ

疎開よりたまたま來り死ににける妻子の骨の瓶をなでをり

覺悟してゐしことながら骨瓶を床の邊におけば妻よ子よ

無創にて働きゐたるひとびともかつがつ死ゆく血を吐きしかば

原子症おもりてゆくか耳のへに鈍き痛みを今朝自覺せり

つくづくし來鳴く夕と季うつりわが創はいつ癒ゆるにあらむ

けふすこし歩行こゝろみて創口の痛みくれども心たのしむ

妻と子に戒名つけていただけり白蓮院と青蓮院も

齒ぐきより血のいでしかばうちしまふ我ならねども心期しつゝ

消えてあらはるゝ點狀出血のつゞきてゆかば我は死なむか

をとめらにひたかくしつゝ咽喉の粘膜出血にくすり塗りつぐ

白木の位牌一枚におさまりし妻子に詣む明り點して

肺臓がざくろの如くなりはてゝ死ゆくといふはまことか

血を増しませと柿の葉を煮て我にのますをとめの心ときに泣かるゝ

原子症狀いづべき程は出できつゝ今は左の耳しひにけり

街に出て珠數ひとかけを求めたりわがだんな寺の石段のぼる

ゆくりなく來りてさびしまひる時木を樵るこだま深きはさまに

爆心地附近の道を歩けば彼に逢へる様な氣がする。近くの被爆した刑務所跡の高臺の廣場では今、平和博覽會が行はれ、又近には國際文化會館ビルディングの基礎工事も進められてゐる。平和へのため餘りにも尊い命を犠牲にした人たちへのせめてもの手向けと思へばそこはかとうらしい氣がする。路をのぼつて通稱グビロの丘に立てばそこには大理石の碑が建てられ刻まれた文にいふ――

西歷一九四五年八月九日十一時五分、八百五十餘名ノワガ師ワガ友、平和ノ先驅者トシテコノ丘ニ散リタマイヌ。一九四七年十月浦上復歸ノ日 長崎醫科大學職員學生一同

その側面に永井隆博士――彼も昨年同じ原子症で八百五十餘名の一人となつた――生前の歌が誠實な字體で彫られてゐる。

傷つける友をさがして火の中にとび入りしまゝ歸らざりけり。(筆者、長崎悟真寺住職)

お父さんの死

出口 大 賢

この一文は、先般日教組によつて全

國より「平和の作文」を募集した際、

四千點の中から厳選したもので、筆者

は大村市立中央小学校五年在學中であ

る。その父を長崎原爆で失つた同君の

平和を願う眞摯なる氣持に、誰か胸打

たれざるものがあるうか。

ここに原爆滿七年の日を迎えるに際

し、日教組の御了解を得て、これを不

幸な犠牲者の冥福を祈り、且、世界の

兵戈無用を希いつつ掲載する。

(1) お父さんの死

昭和二十年八月九月午前十一時

五十分に長崎の浦上に原子ばくだ

んがおちた。その時、ぼくの一ぱ

ん大切なお父さんがなくなられた

のです。

だんだん戦争がひどくなつて來

たので、いなかになたぼくたちは

『長崎にいるお父さんは大丈夫だ

ろうか』

と心配していました。

『ひよつとすると死んでいるかも

しれん』

とぼくが口を出したので、お母さ

んは

『えんぎでもないこと、いいなさ

んな』とおつしやつたそうです。

あの日、長崎の方でもものすごい

音がして、ぐわつとけむりが空に

たち上つたと思うと、火のような

ものが空にまい上つたそうです。

みんなそのひどいのにびつくりし

て

『ひよつとしたら、廣島におちた

というおそろしいばくだんかもし

れんのー』

といつていたそうです。お母さ

んはそれをきいて、きのこのかた

ちにもり上つていく雲を見ながら

『お父さんは、どうしているやろ

か』といわれたので、大きい兄ち

やんが

『もう、死んでいるかもしれな

い』

と答えました。お母さんはだまつ

ておられました。顔の色がなん

だか青くなられたそうです。

『おいが長崎までいつてみゆう

か』

と兄ちやんがいつても、お母さん

は何んともいわれないで、じつと

すわつたまま、ぼくの手をにぎつ

ておられました。

それから二、三日たつてから、

親せきのおじさんが浦上までひと

りで行つてみると、やつぱりお父

さんは死んでいたのです。町も工

場も目茶苦茶で、あつちもこつち

も死んだ人ばかりです。おじさん

はどれが本とうのお父さんのおこ

つだか、わからないので、人のおこつでもいい、だましでもいいからとにかくつれてこようと思つてよく日、かついで歸つてこられました。それを見ると小さくなつて人のかたちをしていました。みんな、あんまり情けなくて、ポロポロなみだをだして泣きました。

お父さんは、けん道もじゆう道も知つていて、つよい元氣な體だつたのに、原子ばくだんにはかなわなかつたのです。

そのあと、大村に来てから、長崎に行つたとき、浦上は木も何にもなくて、バラツクの家ばかりでした。工場の鐵こつも、大學の高いえんとつも、あめのようにグニヤグニヤまがつて、ガスたんくも線ろもこわれたままでした、ここでお父さんが、ぼくの一ばん大切なお父さんが死んだんだと、ぼくは、はをかみしめてがまんしていました。

(2) お父さんの思い出

ぼくは小さかつたので、しつかりしたお父さんの思い出は、あんまりありません。でも、やさしい、お父さんだつたのにと思ひます。

長崎にいるとき、ラジオをきいていたら、だん／＼戦争がひどくなつて、あちらこちらの町が空しゆうでこわされていることをほうりしていました。お父さんとお母さんとは

『長崎にいたらあぶないから、どこかにそかいしようか』と話しあつておられました。

七月の終りに近くなると、遠くの方でばくだんの音や、高しやほうの音がひびいて、毎日敵の飛行機がやつてくるようになりました『いよいよあぶなくなつてきたから一日も早くいなかにもそかいしよう』

と、お母さんがいいだして、大きい兄ちゃん、まさのりとぼく、それにお母さんの四人は長崎からそかいすることになりました。お

父さんは學校の先生のおしごとがあるの、一人長崎にのこられるようになりました。

そのとき、ぼくはまだ四つだつたのです。そこで、いなかに行つて二、三日もたつと、

『お父ちゃんはまだ歸つてこらつさんとね』

と、お母さんにせがむようになつたそうです。

やがて、お父さんが歸つてこられたとき、ぼくは

『あめは、あめは』

といつて、やくそくのあめをせがんだそうです。

二かい目にお父さんが歸つてこられたときには、ぼくはさかんにうたをうたつてきかせたそうです

そのお歸りのとき、兄ちゃんたちと三人で、舟でおくつていきました。舟をこぐ音がギーチラコ、

ギーチラコと、山の向うまでひびきわたります。山のむこうからもギーチラコ、ギーチラコとひびきかえしてきます。船のあとには波

が白くたぎつて、道のようにすうつと、形がついていました。岸につくと、お父さんは

『ヤレ、ヤレ』

といつて、とび上ると、自轉車を上道の道までおし上げ、また、もどつて来て、

『舟のひつくりかやらんごと、注意していけ、病氣もけがもすんなよ』

といつて出かけられました。自轉車にのつたお父さんのすがたが、どんどん小さくなつて、山の岩のかげにかくれてしまいました。岩のかどのすすきが、ゆらゆらとさびしうにゆれていました。

これが、お父さんとおわかれしたさいごです。ぼくは小さかつたけれども、今でもはつきりおぼえているような氣がします。

(3) 今の生活

大村に家がうつつてから、お父さんがいないので、とてもくらしにこまるようになりました。食物

さえ、だんだんなくなつて來たので、お母さんはいなかにいつて、食物をもらつてこようとされました。行くにもお金がないので、行くに行かれず、親類の人におがむようにしてたのんで、やつといくら旅費をかりて出かけられました。

そんなにして生活していても、四人ぐらしでは大へんなことになるので、一人は長崎に、一人はいなかのおじさんがあずかることになりました、ぼくだけはお母さんの所にのこつたのですが、もし、そうしなかつたら、みんな死んでしまつたかも知れません。

それでも、とうとう食物はすくなくならし、お金もなくなつたので、お母さんは『よその裁ほうをして、自分はたべんでも、おまえだけはなんとかしてあげるからね』

と、ぼくをなぐさめたり、はげましたりされます。

ばんも、十二時ごろまでおきて

一生けん命していらつしやいます十時ごろ目をさまして見ると、お母さんが電氣の下で、む中になつてぬつておられました。

『はよねんね』

といいますと、お母さんは

『もうすぐぬるからね』

と答えられました。しばらくうつらうつらして、ひよいと目がさめました。思わず電氣の下をみるとまだお母さんは一心不亂にぬいつづけておられました。お母さんのうしろのかべの時計は十一時三十五分をさしています。いつも夜ふかしばかりされるので、お母さんは

『頭がいたい』

とよくおつしやいます。そんなことを考えると、ぼくは、お母さんはこんなにぼくたちがかわいのかと、ふとんにもぐつたまま、なみだがわいて來ました。

時々、いなかの親せきに行くと、船の上からお父さんのおはかが見えます。そのおはかまいりに

いつたとき、そかいしていた家の所を通りました。とてもなつかしい氣がしました。おはかについて見ると、花やしばがカラカラにかれて、おはかの家の屋根がとんでいました。かえりに山と山のあいだを通つたとき、お父さんを見おくつた日のこと、自轉車にさようならといった日のことを思い出しました。

じいつと、はをくいしばつて、その日、お母さんが、おはかのまえで泣いておられたことを思い出すと、ふとんの中で泣き聲がでそうです。でも、ぼくの泣くのをみればお母さんも泣かれます。ぼくはもつとつよくなつて、お母さんや先生の言われることをしつかり守つて、りつばな人にならなくてはならないと思いました。

(4) 平和な日本にした

い

よく朝、お母さんに

『ゆうべはきつかつたろう』

と、ききますと、

『きつくてもがんばらなければね。それでなければたべていかれないでしょう。ほんとうにお父さんが生きていてくれたらねー』とおつしやいました。

本とうににくだしいせんそうがなかつたら、お父さんも死なないでもすんだのです。一體、だれがなんのためにしたのだろう。なんのために、こんな大ぜいの人にめいわくをかけるようなせんそうをしたのだろう。

ぼくたちが大きくなつたら、けんかなんかぜつたいしません。そしてしつかりおべんきようして、新しい日本、楽しい日本をこしらえたい。

お母さんや先生の教えを守つてよい人間になり、お父さんのあとをついで、りつばな先生になつて平和な日本をこしらえるために、力一ぱい、うんとがんばりたい。

それが原子ばくだんで死んだお父さんを一ばん喜ばせることだと思ひます。

佛 教 入 門

(一)

竹 中 信 常

一 馬に水を飲ませるもの

漁師は魚をとつて吾々に與えてくれる。だが魚をつくり出すことは出来ない。大工は木をけづり、板にし、家を建てることは出来る。然し、山に生えている木をつくり出すことは出来ない。人間は自然にあるものを利用したり、これを作り變えたりして、色々と生活に役立つものを作る。けれども、自然そのものをつくり出すことは、百萬年後の世になつてもなし得ぬであらう。吾々は巨象をも一撃にたおすことが出来る。原子爆彈のように一發で何百萬人という人間を殺らすことさえ出来る。だが然し、その反對に「いのち」を創り出すことは、それがたとえ蟻一匹のいのちでも、人間の手で生み出すことは不可能である。吾々は自分で生まれようと思つて生まれた者は一人としていない。すべての人は両親によつて生み出されたのである。

一寸考えると、人間は何でも出来ると思えるが、少し、眼を廣く思いを深く凝らしてみると、人間の力などはまだまだ大したもの

はない。いや、未來永劫、絶対に人間の力ではなし得ざる、手の届かない世界が残る。馬を川の岸にまで連れて來ることは出来ぬ。だが、その馬に水を飲ませることは、馬が飲もうと思わぬ限り、誰にも出来ない。人間のなすわざには限度がある。ものを作つたりこわしたりすることは出来ても、ものそのものを生み出したり、馬のみでなく他のいかなる心を思ひのままに左右することはどうしても出来ない。他人の心どころではない。自分で自分の心をすら自由に出來ずに、日々を争ひ・怒り・憎しみの中にすごしているのが、吾々のありのままの姿である。「意馬心猿」とはこのような人の心をいうのであるが、ムラムラとおこつて來る憤り、無性に何か欲しくなつてくる欲心など、われとわが心ながら、何ともしようのないものである。よく、ツイフラフラとか、その時の出來心でとかといわれるのも、矢張り、自分の心を押え切れないために、おこる出來ことなのである。このように、人間には、人間の力では何ともしようのないことが、澤山にある。考えようによつては、「ままならぬが浮世のならい」であつて、一から十まで、意のままにならぬのが人の世

なのでもある。

人間の力には限りがある。世の中は、人間のままにならぬことで一杯である。だがこれは仕方がない、と諦めてしまつては駄目。そうかといつて、ままならぬことを、ままにしようとすれば、どうしても角が立ち、他人と衝突をしなければならぬ。

だが、一寸待て。ここで一つ考えてみよう。ままにならぬというのは、ままにしようとするから、ままにならぬのではないか。ままにしようと思わなければ、逆にかえつて、何でもままになるのじやないか知ら。

昔、仙人が一本の木を植えて、それを高く高く天にまで届くように育て、もうよかろうと思つて、スルスルとよち登つて行つた。もう一息で天にとこうという、ほんの少しの所で足を踏みはずして眞逆様に落ちて死んでしまつた。これは中國や印度で語られる童話の筋であるが、天に登ろうなどという、大それた望みを抱いた罰だといわれる。限らないものを徒らに求めるところに、限りある人間の失敗があるのである。馬に水を飲ませようと思つても、飲みたくなければ何としても飲まずことは出来ない。ただむやみに飲ませようとするから飲まないのです、飲みたくなるようにすれば、飲むなどいつでも飲むであらう。飲まねばいられぬようにすることが肝心である。

馬に水を飲ませるもの、これが佛なのである。こう急にいつては理解出来ぬかも知れぬが、くだいていうならば、馬をして水を飲まずにはおれぬようにするものである。人間をして、永遠なるもの、

滅せず、變らず、消えざるものを求めしめるもの、これが佛である。吾々は、自分一個にこだわつてゐる間は、自分という殻を引きづり歩いて、何一つ自由にふるまうことが出来ない。また自分の五十年の生命にこだわつて、永遠不滅の生命のあることを見忘れてしまふ。人をして、自分を捨て、永遠なるものを求めしめるため、自ら永遠なるものとして輝いてゐるものが佛であり、これを教えるものが、佛の道である。

二 流れゆくもの

定めなき風にまかせて散る花を

花とばかりも思ひぬる哉

行誠上人

明日ありと思う心の仇櫻

夜半に嵐の吹かぬものは

親鸞上人

人は生れ來て、死に去るもの。而もたつた一人で、獨死獨來である。或文に「妻子着屬家にあれども伴はず、七珍萬寶藏に満つれども益なし」とある。

世の中の生死の道に連れはなし

たださびしくも獨死獨來

一 休

いかに大勢の家族親戚があろうとも、いかに巨萬の富を蓄えようとも、人はたつた一人で、何一つ持つものもなく、淋しく死の國に旅立たねばならない。この生命は一刻一瞬、ローソクの火の刻々に燃え縮まるように短くなつてゆく。吾々はローソクの火の明りの

みをたよりとしているが、その明りのもとになるローソクは念々の中に燃えとけて行く。いつ一陣の風のために吹き消されるかも知れぬ。まことに「生は念々に遠ざかり、死は刻々に近づく」のである。

生れ來り死に去るものはただに人間のみではない。目を窓外に向ければ、木には花が咲き緑が燃えている。だがその花も葉も、そしてまたその木自身も、やがては散り落ち、朽ち倒れて消えて行く。

満々と水をたたえた川岸に立つてみれば、滔々と流れてゆく水は一度去つて再び歸り來ることはない。何心なくみれば、何の變りもないようにみえても、ひとたび心を靜めてよくみれば、人は日々に老い、花は散り、水は流れ去る。永劫に滅することのないと思われる太陽でも、やがては燃えつきて、滅し去る時が來るのである。凡ゆるものが時と共に移り變つて、一瞬としてとどまつているものはない。すべては無に歸する道を一步一步と歩いているのである。佛教ではこのことを「諸行無常」といつている。

諸行とは凡ゆること、凡ゆるもの。無常とは移り變り、流れ去ること、何一つ不動のものはない。これだけは大丈夫だと思つてしまつてみても、地球が大きく動いているように、やがてはそれも一緒に流れ動いているのである。明日ありと思つて安心していても夜半に風が吹いて來て、ハラハラと散つてしまわぬとも限らぬこの命。紅葉もみぢばを風にまかせて見るよりも

はかなきものは命なりけり

大江千里

何をたよりに生きて行くのか。財産か。地位か。健康か。才智か。金は使えばなくなる。金がいくらあつたところで、他人の命をとつ

て自分の命につき足すことは出來ぬ。地位などは一朝にして失われる。昨日まで大臣の椅子におさまりかえつていた人が、今日はもう何處へ行つたか分らぬような世の中である。健康とてもたよりにならない。いくら丈夫だと威張つていても、自分の乗つたバスが火事になつて黒焦げになつてしまふこともある。驛ののりかえで、羽目が破れて落ちて死ぬこともあつた。自分で自分の體が安全だと、どうして人は保證することが出來よう。風に吹き弄ばされる一枚の木の葉のようにたよりなく、はかないもの、それが人の生命であり、人生である。

こう考えて來ると、人間なんてつまらぬものだ。ただあくせくとその日その日のパンのために働き、やがては死んでしまふんだということになる。これでよいのだろうか。すべてのものが、一瞬の休みなく、破滅の淵を目指して進んでいる、この娑婆世界に、何の樂しみがあるのだろうか。大體、人間は何のために生きているのだろうか。こう考えるようになりはしないか。若し、あなたがそう考えたとしたら、一步前進である。馬が水を飲みたくなつたのと同じなのである。さあ、そうなれば、次には、「どうやつて水を飲むか」ということである。

釋尊も矢張り、吾々と同じようにこう考えられたのである。而も釋尊は更に進んで、すべてが移り變るこの世の中で、たつた一つ、少しも動かず、永久に變らざるものがある。丁度、川の水は流れ去つて止まらぬが、川そのものは少しも動かないのと同じように。それは何か。それが「法」。即ち「凡ゆるものは移り變るものである」という法則、又は原理、そしてまた、その法則を體驗された釋尊の悟り。これこそまことに永遠不滅のものなのである。(つづく)

夏に思ふ三人集

夏に思ふ

佐藤良智

——その一——

わたしは、夏がすきだ。夏は、人間が暑さに、いためつけられる季節ではあるが、決してわるいものではない。

夏は少年の夢の世界だ。その夢は、人間の生涯を通じて、どこかにひそめられている夢でもある。夏の雲。夏の夕焼け。夏の海。夏の山。またれる夏の休みのなかに、もろもろの希望が秘められている。

船に乗つて、どこか、遠い遠いところへ行

つてみたい。海のかなたにあるであろうか、夢のくに。少年にとつて夏は夢のくにだ。いそぎを越えようという、わたしのこゝろのなかに、少年のこゝろがひそかに生きているのもふしぎだ。身邊のあまりのわづらわしさにふと、海がみたいな、と思ふことがある。もちろん、夏の海が考えられている。

このくにの海岸線の多いのも少年にとつては仕合せだ。海ぞいの子供達が海のかなたをあこがれ、山中の少年が、海にあこがれる。海は希望である。

山の高きにあこがれをもつ山も夏の幻想の一つだ。これは人の自然のさがであろう。山はむしろ、青年壯年の愛するところではなからうか。遠きをあこがれ、高きをあこがれる。少年の夢、青年の希望、人生のあこがれだ。人類の前途に希望をもちたい。持たなければならぬ。ともすれば、暗い影が、今の世に、さしがちである。人類に希望が無いのか、息苦しい。夏の幻想が、われわれ

のこゝろに、あこがれを、よびさまさせてほしい。いまひとたび、少年が、海のかなたにもつたあこがれを、あの、いきいきとしたあこがれを、人類はもたなければ、ならないのでは、なからうか。

——その二——

夏の幻想は、幼き日の、東京の夕ぐれと結ぶ。東京の夏が、すきなのも、この幼き日の思いが多分にはたらいっているであろう。夏の縁日の。いつのまにか、明治の子といふ、なにか、古めかしいものになつてしまつたが明治に生れ、大正に育つた私共には、どこか呑氣なところがありはしないか。それほど、大正という時期は、まあまあ、太平の世であつたと思ふ。その頃の東京の縁日の風景は、まことになつかしい。夕飯をすませて、浴衣に着かえ、でかける。淡いアセチレンのひかりが、ひとびとの顔をほのかに照らす。赤いへこをびをしめた少女など、江戸の名残りが今に思ふと、なつかしい。えん歌師のヴィオリンの音が、耳にきこえるようだ。わたしは歸りにきまつて、植木の一本か、二本を手にしたものだ。今でも、植木いぢりがすきなのも、その頃からのものだと思ふと、人間の趣

味などは、あまり變らないものとみえる。

どの位續いたものか、忘れたが、ある時期縁日傳道に、夢中になつたのを、思いだす。人々の出さかつたころ、縁日の光茫の薄れかゝつているところに位置をしめ、提灯一つを路傍にたてゝ始める。青年の情熱をかたむけて、シャベリ續けたものである。時には、聴手が、感動して、いつ迄も去らず、濟んでから、何かと質問などに、長い時間を、夜の町に、すごしたことなど思いだされる。未熟な青年の信仰告白など、今、思いだすとはづかしいかぎりだが、しかし、そのなかに、なにかあつた。無鐵砲で、鐵面皮だが、何かあつたと、ひそかに思つてゐる。

—その三—

東京の夏の夕方の、涼風は格別だ。一夏に二三日を除いては、大抵、日中どの様に暑くても、日没頃になると、颯々たる涼風が窓の風鈴をゆりうごかす。風通しのよいところなどは、時に冷やかさ、さえ覚えさせる。東京の夏はこの涼風で救われるのである。

そこえゆくと、京都の夜はむしあつい。實に暑い。鴨川の夕涼みでもなかつた日には、からだのやりばに困る位だ。

ひと夏、京都で過したことが、思いだされる。夏の京都で印象的なのは、大文字、の行事だ。京都、奈良は、いふまでもなく、優雅なまちである。震災をうけなかつたことは、本當によかつた。自分のところは、無一物になつたが、京都、奈良が残つたことは、自分のところが残つたようにさえ思える。兩古都を偲べば、こゝろ豊かである。平安の都には優しさ、寂びがあるが、坂東太郎の雄大さはない。大文字は、この都に、大きく、大の字を書いたようだ。あの山に、大の字を書いた氣持ちが、何かわかるような氣がする。大文字の、かゝり火に祖先の精靈を祭り、典雅に併せ大の字をこゝろにひめて、暮すひとびとに、仕合せの多からんことを念じたい。

大佛様のお首

佐藤 密雄

これについては古來説が多い。制作當時頭の重みで下向きになつたとする説があり、頭部を別に鑄造して胴體に擧げる時につけ損つたとする説があり、又大佛の頭は一度落ちて再度擧げた時に傾いたとする説がある。此等の三説は共に本來頭部が胴體に垂直に着いて居るべきものが、不當に前傾し顔面が下向きになつたと言ふのである。そして近頃の様に批判的見方の流行時代には特にお寺で書いた説明等を信ぜず勝手に此等の説をなすものが多く、特に遠足に生徒を引率して來た高等學校の先生が、關東震災で大佛様の首が落ちて、其の修理の時に頭の重みで前傾下向きになつたと説く珍説さへ生ずることがある。生徒にうそを教へることの重大さを心配して其先生に注意しても史學の専門の教授から聞いた等と言つて自説の正しさを主張される。所が、造形藝術の専門家の話をきくと、此等の説は全く他愛のない素人の憶測にすぎないことになる。

藝術大學の西田教授の話を聞き乍ら大佛を見ると、顔は前傾して眼は下向になつて居るが耳は胴體に垂直について居る。若し顔面を垂直に起すとすると耳は背面へ傾くことになる。此は、大佛を作る時に頭を前傾させて、

鎌倉大佛はお顔が下向きになつて居るが、

更に目を下向にさせて作つたもので、その爲に姿態に生ずる無理な感じを救ふ爲めに耳は垂直につけたのである。此の垂直の耳を見ただけでも計畫して最初から前傾の頭部を作つたことは明らかなことになると思われる。

佛像には必ず此を拜む拜座と言ふものがある。其處で其の佛像を拜むべきものとされて居るが鎌倉大佛は現に礎石があることから明らかな様に四百年前迄は佛殿の中にあつて拜座は巨像の近くにあつたのである。即ち堂内で拜ませる大佛が造られたのであつて、巨像の近くに兩眼の焦點が来る様に設計して、先づ頭を前傾させ、更に眼を下向きに刻み込んだものである。然も頭部の無理な前傾を救ふ爲めに耳をことさらに普通に着けたもので此は頭部の前傾表現と垂直表現との兩者を併せたもので専門的には同存化型式とか同存化表現とか稱せられて居るものださうである。其處で、専門家に言せると鎌倉大佛は今日露座で有名であるが、元來は佛殿の中にあつたと言ふだけではなく、佛像の藝術的構造の上から言つても拜座が近接して居て、佛殿の中にあつて然るべきものである。然し、拜座が佛像に近接して居ることが必ずしも佛殿を絶對に必要とする意味ではないと言ふのが素人

の私の意見でもある。

信ずる強さ

藤田 寛海

此の間、資料を蒐めに山形市から十里も山奥に出かけたが、山村特有の落付いたうちにも、また何處となく近代的な氣分が漂つて、想つた程田舎らしくなかつたのは意外であつた。

村の年寄りたちは、近頃は「バス」が通るやうになつたので、若いものたちは一寸した買物にも山形まで出かけてゆくから、昔と違つて随分便利にもなつたが、一體に派手にもなつて、ひと頃はダンスなどといふ「外國の踊り」も仲々盛んでした、と言つてゐた。

それで想ふのだが、人間が忙しくなつたら、此れに伴つて交通が發達するのか、或ひは、交通機關が進歩するから、そのため此れを利用して出歩き、人間が益々忙しくなるか

の問題である。

昔は交通も不便で、それこそ山形へは二日も三日もかゝつて往復したから、よくよくの用事でもない限り、買物などにそんな遠方へ出かける者は居なかつたといふ、此の村びとの言葉からすれば、交通機關が發達し「バス」が通るやうになつたからこそ出歩く人間も増えて、そのため人々は益々忙しい日々を過してゐると察せられた。

さう考へると、もつともつと高度に交通機關が發達したならば、やたらに用事を求めて一寸した事にも「汽車」を使ひ「飛行機」に乗つて出歩く者ばかりが増えてしまつて、そのため人間は四六時中西に東に動き廻り、旅をつづけてゐるうちに一生を終つてしまつて固定した場所に自分の家などといふものをもたずに済むかもしれない。

俳人芭蕉が一五〇年程の昔に「舟ノ上ニ生涯ヲ浮べ、馬ノロヲトラヘテ老ヲムカフルモノハ、日々旅ニシテ、旅ヲスミカトス」と言つたのは、そんな積りではなかつたらうが、正にこのことを言ひ當てたと言へるであらうか。

それにしても、都會に憧れながらも、簡單に往來する「足」をもたなかつた此の山村の

若者たちにとつて、「バス」の開通がどれ程大きな喜びと夢を實現させたかは想ふに難くない。

然しまた、此の「バス」といふ文明の利器の開通によつて、長い間憧れてゐた都會の空氣を胸一ぱいに吸ひこみ、特に村の年寄りの言葉を借りて云へば「ダンスなどといふ外國の踊り」を折角村に持ち込みながら、またどうした譯でひと頃ほどに今は盛ではないのかと、餘計な事ながら聞いてみたら、若い衆たちは「ソでもナ、もう飽きたヂャー」と笑ひながら答へた。

凡そ、「力」とか「強さ」といふものは相手あつてのものである。

例へば、重い物を持ち上げたとき「あの男は力がある」とよく言ふが、よくよく考へてみると、「力がある」のは其の重い物を持ち上げるまでの状態についても言はるべきであつて、持ち上げてしまへば「力があつた」と言ふのが正しからう。

竟り「強い」といふのは相手に對して「力」が常に内に保ちつづけられてゐるとき、即ち「自制」のすがたにあるときが最も強いのであつて、ひと度相手に向つて發揮されてしまつたならば、その「力」は消滅してしまふ。

徳川時代（即ち今から一七〇年程の昔であるが）に、幕府はキリシタンの信仰を禁止したことがあつた。そこで信者の多くは棄教・轉宗したが、尙ほ多くのキリシタン信者が、數々の迫害と戦ひながら秘かにその信仰をたもちつづけてゐた。此れらの信者たちは「かくれ」とか「かくれキリシタン」と呼ばれてゐる。山形地方にも、此の「かくれキリシタン」が随分澤山、文字通りかくれてゐた。ところが、明治になつて信教の自由が許されるやうになつたとき、山形地方にかくれてゐた殆んど總てのものは今までのキリシタン信仰を棄て、轉宗してしまつた。

此れは何んとしても不思議なことに思はれるやう。

迫害や壓迫の激しかつた時代に、ずつとキリシタンの信仰を隠れながらも保ちつづけた者たちが、自由の世にそれを棄て、しまつたのは何故であらうか。

想ふに、迫害とか壓迫に抵抗しようとするところに此の人たちは信仰の「強さ」を保ちえたのであつたが、明治になつて自由の時代を迎へ、抵抗すべき對象を失つたので、その「強さ」は自然とくじけ失はれたに違ひない。

時代と事例・場所と心境は異なるものではあるが、若い衆たちの「ソでもナ、飽きたヂャー」といつた言葉を聞いたとき、不圖こんな事を考へた。

「強さ」は己れを壓へ、「力」を内に保つとき燃えさかる。信仰の強さも、またこの例にもれない。

アミダ佛に身をゆだね、己れを信じての深い信仰の生活、それはまた「此の世」を見きわめる事によつて保ちうるであらう。

「此の世」即ち「無常」の相である。

自分の身も、それを圍る生きとし生きるもの總ては決して永存しえないといふことである。

然し、佛の慈悲のみは不滅に輝く。

常に「無常」の「此の世」を思ひつゝ、「不滅」の「佛の慈悲」を心に抱きつづけるととき人は「生きる」強さも信仰の強さも保つことが出来るであらう。

×

×

×

×

サーマルの日本人村 (2)

— 開教日誌の一節より —

白井憲成

不毛の地に立つ

この炎熱不毛の地に、これら多くの日本人が住みつくに到つた理由は、前述の地理的條件と密接に關聯している事は事實である。しかしこゝで、それらの詮索よりも更に大事な事がある。それは彼等の業績の數々をより詳細に伝える事である。

水の一滴は、血の一滴にも等しいこの地では、先決の問題は水を得ると云ふ事であつた。幸にして、この一滴の水を得る爲に、キャリフォルニアから出る油が水の如くに使はれたのである。これが開拓の爲の根本的な條件だつたのである。あらゆる機械力をつかつて、先ず巨大な井戸が掘られたのである。不可能

と思はれる、この自然への挑戦を可能ならしめたものは、機械力である。そしてそれが不屈の闘魂と共に燃えあがつたのであらう。

幸に掘りあてられた水脈から、くみあげられた水は、湯の如くあつた。しかしそれがどんなにあつても、水である事に依つて、よみがえつたのである。焼石に水はあたらない。かわききつた砂地に注がれる水は、照りつける太陽の直射を受けて、おそろしい速さですいこまれていつてしまふ。幸に掘りあてられた水脈から流れ出た水を、何とかして地面に保たしめる爲には、何よりも土質を改良する事である。遠隔の地より運ばれた堆肥は、砂中に埋められ、地面に水濕を保つ爲のあらゆる工夫が施された。砂地が作付に適する、

土質にまで變化する爲には、それこそ長期の年月を要する。この間こそ、臥薪嘗膽の苦しみであらう。そして又この苦しみに耐え得しめるものは、手にする土への愛着でもあらう。死せる土をよみがえらせるもの、それは熱烈なこの自然への挑戦であり乍ら、その背後にひそむ、限りなきこの魔の自然への魅力であらう。この不毛の地に若々しき緑ふく一本の草を夢みる希望は、人間のみが持つ、自然への郷愁でもあらう。

この砂くれを掴んで、或時は緑の平原を夢み、又或時は自然の猛威の前に泣き伏した事であらう。于天に一滴の雨を乞ふ農夫の願ひには、希望の綱がある。しかし、この地にはその希望の綱は絶対にない。『一年に一回も雨

を見ないですよ』と云ふ人は、更に『こゝに住みついてから二・三十年一回も雨が降りませんよ』と語勢を強める。だから人々は、たゞ與えられたまゝの自然のみに依存している譯には行かない。大地にふり下す一鍬一鍬はよりよき大地を作り上げると云ふ、彼等の靈魂のいふきだつたのである。希望は、誰しもが抱き得る、しかし、足下の土くれに始めてふり下された一鍬に依つて、その希望は眞に希望として輝き始めたのである。この土くれを手にした刹那、絶望の大地は緑濃き平原につらなつたのである。

過ぎ去れば、全てが思ひ出の一頁である。又それは夢でもあらう。しかし、こゝに居る人々の思ひ出は、枝もたわわに直射を受けて輝くオレンジの如く黄金色に輝く。土くれへの愛着が、眼に映る葡萄畑に實つたのである。

人々の多くは、彼等の苦闘の多くを語らない。それは必要がないからだ。見える限りの農園が、彼等にかはつて語っているのだ。そして咄々として語る老人たちの陽やけした顔ふしくれたつた手が、それを裏付けているのである。現在これらの人々の家屋内は、アメリカだけあつて、日本と比較にならぬ程機械

化されている。百二十度の炎熱も、たえず廻轉するクーラーに依つて冷房される。日本の農家とは比較にならない清潔さである。中には、『二萬ドルをかけたよ』と言ふ贅をこらした家に案内された事もある。だからと言つて、それは日本よりは良いなどと簡単に、結論づける事は出来ない。それは、農場のかたすみに點在する彼等の使用人である「メキシカン」の小屋を見ただけで、想像がつくからである。

完成された農場は全て大農場である。したがつて、多くの使用人がいる事は當然である。使用人が殆んど全て、メキシコ人である理由は、既に述べた通りである。これらのメキシコ人が住む小屋は全くあばれである。開かれたおしあげ窓は唯一の採光と通風口である。何の家具とても無く、ましてや冷房設備一つない、すき間だらけの小屋は倒れかゝつてゐる。突風が吹けば、全く砂でおほわれてしまふであらう。板葺きの屋根からは、灼熱の太陽が照りつける事であらう。掘り坑式の便所がすぐ近くに、あけつばなしに立つてゐる。蠅がうるさくたかつてゐる事は、當り前である。

彼等は、明ければトラックに乗せられて、

農場におくられ、炎天に勞働に従事する。時間が來れば、集めて廻る農場主の日本人のトラックに乗つて食事に歸る。何の楽しみとてもない日々を、この農場におしつけてゆく。農産物收穫時には、彼等に對する需要は大きい。しかし、そうでない時期もある譯である。これはそこに働くメキシコ人の姿なのだ。しかしこれは、單にメキシカンのみの姿ではないであらう。今は多くの使用人をつかふ身分にある日本人たちも、かつては、更にこれ以上の苦しみの中に努力し續けて來たのである。

農場のはなかに續くうねにたたずんで、忘然と行き交ふ自動車の流れに視線をなげる、このメキシコ人勞働者の姿は、かつての日本人の姿でもあつたのであらうと聯想は聯想を呼ぶ。彼等のまなざしは絶望に近い。進退は鈍い。話し聲のテンポはゆるい。それは當り前である。この自然に生きる、あえぎの姿だからである。時間働きに依つて得る賃金は週末に整算されると云ふ。その金は彼等の衣食をまかなふには事缺かない。それを賣る店は、たゞ一軒しかない。しかもそれも日本人が經營する。たゞ働いて喰つてゐるといふのだけかも知れない。今は富裕な生活をいとな

む日本人は、はるか遠く、ロス・アンゼルス
の市まで出かけては用を足す。市中に住む日
本人よりも、はるかに立派な新しい自動車を
乗り廻す彼等には、交通の發達に依つて、こ
の地に住む事の苦しみが除々に輕減されて行
く事は事實であらう。しかし賃働きのこれら
のメキシコ人が自分の車を持つ筈がない。少
しでも金をたくわえ、そして西部の發達せる
沿岸都市に出る事が、彼等の唯一の願ひなの
であらう。これは、老人たちが語つた『あの
山を越えて、今でも入つて来るメキシコ人が
澤山あるよ』と云ふ言葉を思ひ出す時、この
地に、この様に日本人の多くが住むに到つた
過程を、こゝに働くメキシコ人からも伺ひ知
り得るやうにも思はれる。

實のつたオレンジ

多くの日本人の長年の努力が實を結んだ。
オレンジ、葡萄等の果樹を始めとして、茄子、
瓜、トマト、唐芥子等の野菜類に到る迄殆ん
どあらゆるものを産出する。

改良せられた土地には、縦横に配水管がう
められ、その配水管から流れる水は、各畑に
整然と作られたうねの間を通つて、更に細細
狀に流れる。

全てが機械化された農場で使はれる農耕機
は種々雑多である。日本の農家が持つ農器具
の各々がそれ／＼に應じた自動的な農耕機に
なつて居る。大きく掘り起すもの、細かくな
らすもの、畝を割るもの、全てが機械である。
人間の勞力は全て機械を使ふ爲に使はれる。

『アメリカ人は器械を作る事よりも、機械を
使ふ事が上手だ』と批評した人がある。それ
は機械を使はなければ、どうにもならぬ自然
が、自然的要請として機械を發明させ、した
がつて機械を使ふ上手な能力を作り上げたの
だ。要するに自然の力なのであらう。これだ
けは人間の勞働力に依らなければ、と思はれ
るやうな事を易々と機械がやつていつてしま
ふ。その爲には、自然は逆に機械的自然に改
變せられるといふ事にもなる。これは日本で
は想像出来ない。オレンジの樹間をたがやす
トラクターは、樹と樹の間隔に依つて作ら
れたといふよりも、そのトラクターのたが
やす幅に應じて、最初から苗木が植えられた
のかも知れない。耕やして廻るトラクター
に觸れた枝からぽと／＼と落ちるオレンジは
大して問題にはならない。それはこの平原に
達する迄に、あの砂漠で行きぢがつた三十噸・
五十噸つみのトラクターの、箱にもつめないば

らづみのオレンジの山からでも想像できる。
葡萄畑も同じである。

珍らしいデッツの林がある。原産はエジプ
トだと聞いた。荀鐵科に屬するのだらう。幹
は一かゝえ以上もあり、高さは三・四十呎は
ある。幹の頂上からは、大きな葉が扇の様に
ひらいて居る。その扇の要にあたる所から、
鈴なりになつた實の枝がおもそうにたれ下つ
ている。熟しきつた實は、下の砂地に落ちる。
そして芽を出すのだらう。その實は、支那の
なつめよりやゝ大きい位で、茶褐色をしてい
る。丁度梅干のやうに、表面はしわのよつて
表面の皮はかたい。これをひきさいてたべ
ると、干柿と干葡萄とを一緒にした様で、とて
も美味しい。アメリカでも、一番高價な果實
だそうである。もともと蘇鐵の實は藥用とし
て古來から用ひられているが、この實はとて
も高雅な、そして又濃厚な味を持つて居る。
一枚ずつ落ちる葉のつけ根は、うろこの様に
なつて居る。勿論日本の蘇鐵の比ではない。
一本一本の木に梯子がく／＼りつけてある。そ
れは眞中にのびる雄花の花粉をとつて、房々
とたれさがる雌花に人工受精させこの木にの
ぼる爲である。

この林は全く熱帶の雰圍氣をかもし出す。

整然と並ぶ林の中を、大きなトラックターが猛然とうなりをあげて通る。又細かくくたく車が、そしてそのあとには配水渠をつける機械が通る。水が河のやうに流される。こうしてデッツの林は繋つてゐる。

高温である爲、他の農場より早く、したがつて高價に野菜が出荷出来る。それがあえてこゝに農場をひらかしめた所以でもある。高速度化された交通網は、少しも鮮度を失ふことなく、こゝで出来る産物を食前に供するのである。收穫時に於ける流れ作用に依る出荷風景は誠にめまぐるしい。農場でもぎとられた砂ぼこりのついた、あつくゆだつたやうなトマトが山のやうに運びこまれる。水槽に過ぎからつぎへ流しこまれ、水であらはれたトマトは、つやゝかに輝いている。しき紙をひいた箱に手ばやくつめ込まれ、つぎ／＼とくぎづけされた箱は、それと同じならびに、口をあけてまつてゐるトラックの中にどん／＼とつみかさねられる。そしてこれらのトラックは、あちらから、こちらからと群をなして夜を徹して市場へ運ばれる。市中の人は遅くとも晝には、この新鮮なトマトにありつける事になる。

子供の頭ほどの大きな茄子、それは日本の

秋茄子より更に色は濃い。勿論、日本のやうに温い苗床から移植するなどといふ手のこんだやり方は採用せられない。トマトにしても同じことである。若しこの茄子を日本で作つたら、満腹感を喜ぶ日本人でも、これ一つ一度には食べられないだらう。

びつくりする程大きなとうがらし、これはアメリカ人が好んで作るに用ひられる。瓜とうがらしに似たチリーは、メキシカン料理にはなくてならないものだ。こんな刺戟物を好むのは、やはりメキシコと云ふ熱帯的自然からである。

こゝでは米穀以外の野菜と果實は殆んど産出する。

こんな實りを誰が豫想したらうか。不毛の地のよみがえり、更にそれが黄金の實りの平原にまで、幾何の年月をけみした事であらう。不毛の土くれを手にして立つた日本人が、オレンジの黄金の山、トマトの山の中に、ほゝえみをうかべて立てる日が來たのである。しかし彼等の多くは七十の坂を越している。ほゝえみの裏には何かなしさみしさがたゞよつてゐる。既に仕事は二世・三世にうけつがれてゐる。白髪をかきあげて語る老人は既にかゝみ腰である。

つながれた環^わ

七月始め、この日本人村での元老級の人が突然死んだ。年は勿論七十歳以上である。

家と家とが、車で少くとも五十五分と離れてゐるこの村にも、吹きさらしの所に、教會兼講堂風の建物が一棟たつてゐる。ひろくコーチューラ平原をも含めて、こゝに住む日本人が子弟教育の爲に建てた日本語學校なのである。子弟である二世が大きくなると共に、更に戦後二世の日本に對する觀心がうすらいだ爲、現在にはたゞ月々一回づゝゝそれも農繁期は休むゝの説教と時たま來る巡迴映畫にし、か、使はれてゐない。この講堂でいとなまれるお通夜の爲に澤山の日本人が集まつて來る。お通夜は夜にきまつてゐる。何一つ裝飾もない木造のお粗末な建物にも、何百燭と電燈がつけられ、通風口には扇風機が威勢の良き音をたてゝ廻つてゐる。かりにしつらへられた祭壇は、誰かが故郷を訪問した際、日本から持ち歸つたと思はれる佛壇一つ。それに向つて木の折たゝみの腰かけが七・八十脚位不規則にならべられてゐる。夜になつたからといつて、すぐには涼しくはならない。相變らずの暑さである。遠く近くに見えるヘッド・

ライトは皆こゝに集る日系人の車なのだらう。ふと支那大陸を旅した車を想ひ起す。北京から京漢線を南下して、黄河を渡る所で宿つた事がある。無限の平原のひろがり、それをおほふ大空、そのたゞ中に立つた孤獨觀が再びこゝで迫つて来る。宗教の原初形態は、種々の相違はあれ、先づこの自然と人間との共感に始まるのだ。自然は、その各々のすがたに應じて、種々の感情をもつて迫る事であらう。しかし如何に異つても、その感情を通して、背後にひそむ大きな力が感得されるからである。

夜とはいえ、砂まじりのあつゝぽい風は吹きつける。三々五々集まり来る人々は、勿論自動車で来る。参列者がだんゝふえて来るとがらんだりの式場も賑はしくなつて来る。

血のつながつてゐるものは、たゞ子供だけかといふこの日本人の間では、お互の孤獨をなぐさめる爲におのずと友人つきあひ、同縣人つき合ひがしげくなつて来る。随分遠方から皆集つて来るらしい。その中には、昔この地で一緒に働いた知己もいるかも知れない。四時間・五時間もかゝつたと話し合つてゐる。それよりも更に興味をひいた事は、何年ぶりかで再會するその再會の喜びである。「あ

の時はどうだつた、こうだつた……」と少くとも戦争中の事にまでさかのぼつてしまふ。そして今現に健在で再會出来る事の喜びを、逝ける友人を慰める言葉の中にも含ませるのである。こんな話題からその様に分散した廣い大陸、相互にはしげくも交通出来ない程の彼等の日々の生活の多忙さが伺はれる。お通夜のしめやかさは、たゞほんの一瞬にしか過ぎない。『戦後は毎夏、一人ずつ死んで行きますよ』と顔を見合せ乍ら語る老人の数は、既に十人たらずである。『來年は誰の番かな』と旅立つ順序を待つてゐるこの老人たちは、なくなつた友人の靈をなぐさむるよりも、お互ひが生ける間に、と、自然にしめつぽい話から遠ざかつてしまふ。

遠隔の地からあつまる人々は、互に、色々なニュースをもたらす。それは『誰々は元氣だ』と言ふ事などはニュースではない。『誰々も死んでしまつた』と云ふ事の方が、ニュースとしては更に意味が深い。死んで行つた友人から、自分の死を聯想するのである。生き残つたと云ふ喜びは、だんゝ取り残されて行くさみしさと交錯する。自分にも同じように迫つて来る死を、友の死に知る時、この限られたサークルを愈々せばめて行つてしまふ

のである。それは、友の死をいたむと云ふ感情から、更に更に深く複雑な感情へと追ひやる。誰しもが、迫り来る死を否定しはしないであらう。しかしこのへき遠の地にある、限られた同僚との世界では、迫り来る死の現實感、更に深酷なのである。(つづく)

浄土トラクト

B六、十六頁
價十圓送八圓

浄土編集部編

新刊

信徒必携

信徒としてぜひ之だけは知つておきたい「浄土」のみおしえ・みほとけのこと・お念佛・信徒のつとめ・其他・佛壇・香・珠數・木魚・おけさ・佛式作法一通りを丁ねいに説明したもの

藤井實應著

一枚起請文

宗祖信仰の本質を、新しい思想と深い體驗によつて、かんでくだいて説かれた念佛信仰者必見の書

法然上人讃仰會

吉田絃二郎作

戯曲

京の時雨 (3)

前號まで……項は高倉天皇の御代、京黒谷にて法然上人が念佛の教を開かれてまもなく。當代並びなき盜賊、天野四郎は發心して上人の門に教を乞ひ教阿彌と名も頂いて念佛の精進怠りなく過去の罪業を洗うのであつた。しかし、彼の残しおいた妻阿萬を、昔より狂はしく戀う津の三郎がいる。三郎は四郎の隠家に阿萬を訪ふ毎に指をかみきられつゝも執念果つるとも見えない。さて、行く雲、逝く水と我身を墨染の教阿彌は、今宵、京の外れの宿場に泊つてゐる。……

第七場

(こほろぎが鳴いてゐる)

子分一 頭、こゝにお泊りでしたか。

教阿彌 頭と呼ぶことだけはよしてくれ。ぞつとするからのう。親爺と呼んでくれ。

子分一 つい昔の癖が出やしてな。御免なさつて、

子分二 今夜はめつきり冷えますな。すこし櫓でも焚きませうか。

教阿彌 焚き火かありがたいな。圍爐裡に火種子が残つてゐる。

子分二 この櫓をくべませう。

教阿彌 あゝ、結構な火だ。ありがたいことだ。南無阿彌陀佛。

子分一 また南無阿彌陀佛か、圍爐裡の火が燃えても南無阿彌陀佛。

教阿彌 ありがたいぢやないか。おれのやうな、罪業の深い人間にも、この寒い夜に、あたたかな焚き火をめぐんで下さる。

みんな阿彌陀さまのお慈悲ぢや。南無阿彌陀佛々々々々々々。

子分二 まあ人間の心といふものはよく變れば變るものだなあ、こ

れが六七年前までは津の國から山城丹波をかけて、鬼のやうに、顫え上がらせた耳四郎親分であらうとは誰れも知る

まい。

教阿彌 もうそんな話は止せ。耳が汚れる。なまいだぶ、なまいだぶと。(立ち上る)

子分一 親爺さん、どこへ行きなさる。

教阿彌 厩の横に焚き木が積んであつたのを見て置いたでな。

子分一 親爺さんに焚き木を取らせて、若い者があたれるものか。わしが取つて來ませう。

教阿彌 まあよいわ、わしにまかせて置きな。わしは昔とちがひ、

今は出家の身も同然、今夜はお前達に焚き火の供養をさしてくれ(と馬小屋の方へ行く)

子分二 親爺さん、たうとう焚き木を取りに行つたよ。親爺さん、暗くて見えまい。燈を見せようか。

教阿彌 大丈夫だよ(と馬小屋の方から聞える)

子分一 頭はまつたく人が變つたなあ。

子分二 變つたよ。まるで佛さまのやうになつた。これなら、先つきの話をしてても大丈夫だらう。

子分一 先つきの話かい。さあ、今の頭は昔の耳四郎親分とはちがふ。

子分二 あれやもう人間ではない。阿彌陀さまだから、あれを話しても氣づかひはあるまい。

教阿彌 さあ薪を持つて來た。うんと焚き火にあたつてくれ。

子分一、二、すみません。

教阿彌 さつきから時雨れて來たやうで、大分寒うなつた。

子分二 親爺さんに焚いてもらつた火で時雨の寒さを忘れるなんて。

子分一 勿體ないことぢや。だがかうして親爺さんといつしよに焚き火にあたつてゐると、手荒いかせぎをしてゐた昔のことを思ひ出すよ。

教阿彌 ばかなことを言うな、手前たちと話してゐると録なことは聞かない。耳のけがれ、心のけがれぢや、おれはお念佛でも申さう。(と壁に面し念佛をつゞける)なまいだぶ、なまいだぶ、

子分一 親爺さん、壁に向いて念佛をはじめたよ。

子分二 親爺さんの念佛も久しいもんだな。

子分一 久しいといへば、先つき逢つたあの男な、あれも大分久しぶりだつたではないか。

教阿彌 なまいだ、なまいだ、なまいだ(と一層聲を高くする)

子分二 あの男まだ生きてをつたのだな。

子分一 幽霊かと思つたよ。最初見た時は

教阿彌 なまいだ、なまいだ、々々々々(と念佛の聲を低め、子分

にちの會話にやゝ氣をとられる)

子分二 もう五六年にもなるだらうが執念ぶかい男だなあ。

教阿彌 (急に念佛を止め) おい、お前たちは何の話をしてゐたのだ。

子分二 (教阿彌が餘り眞剣な顔をしてゐるのでやゝぞつとして) いえ、何でもありませんがな。

教阿彌 何でもないことはないだろう。

子分一 何でもありません。つまらぬ話です。

教阿彌 お前たち執念ぶかい男に、今夜そこいらで逢つたのだから。その執念ぶかい男つて誰のことだ。わしにも話してくれ、水臭さいぢやないか。話せといへば、

子分一 話しても大丈夫かな。

子分二 親爺さん、それぢや話しますが、わたし等二人で、さつき三郎に逢ひましたよ。

教阿彌 三郎?

子分一 津の三郎にちがひありません。乞食のやうな姿でしたが。

教阿彌 津の三郎ツ? そして何處へ行きをつた?

子分二 何處へ行くんですか、あの柳の土堤を歩いてゐました。

教阿彌 一人で歩いてをつたか?

子分一 それが連れの女がございましたな。

教阿彌 連れの女か? 乞食のやうに落ちぶれた三郎奴と、連れ立

つて歩く女があるかい。お前たちが見たといふ男は三郎ではあるまい。

子分一 いえ、たしかに三郎でした。月の光りに指のない手をかざして、見てをりました。

教阿彌 それならますます伴れの女があつたなどといふのがおかしい。どこの世界に。

子分一 あのやうな男といつしよに歩く女がといふんでせう。

子分二 ところがあるんですわい。

子分一 阿萬さんがいつしよでした。

教阿彌 阿萬が、津の三郎といつしよに歩いてゐたつ?

(教阿彌の顔色がにはかに變るので子分共はたぢた

ちとなり)

子分二 いえ、姐さんがいつしよに歩いてゐたといふわけではないのです。あの……夜のことですし。

子分一 阿萬さんが、何で三郎と連れ立つて歩きますものかい。それは人ちがひでしたやろ。

教阿彌 もういい。何もいふな(阿修羅のごとくものすごく)

子分二 親爺さん、何うしました?

子分一 何處へ行きなさる。

「S.E 馬のいななき、足掻きの音、厩の貫抜を壊す音」

子分二 おや、おや、親爺さん馬を曳き出したよ。

(子分一、二、馬小屋に走り教阿彌を引き留めんとする)

子分一、二、親爺さん、あぶない、あぶない。

教阿彌 えゝ、邪魔するな。

「S.E 馬のいななき、駈け出す音」

博 勞 馬盗人だ、馬盗人だ！(とあわてふためいて教阿彌の後を追ふ)

(間)

「S.E こほろぎの聲」

子分一 佛さまのやうに生れ變つて、蟲一疋殺さぬ親爺さんが、津の三郎のことゝいへばまるで氣が狂つたやうになる。

子分二 因縁とでもいふのかなあ、ものすごい顔。おれたちにはわからぬ。

(つづく)

芝園だより

時雨は來月號を以て完結。

○惡夢から覺めたようなあの終戦の月がやつて来る。其後の占領の功罪について、いろ／＼論議もされ、ジャーナリストも賣らんかなの商魂凄く其向の秘められた物語が續々出版される。しかし、中には反動的、右翼的なものも多い。

○本月より竹中氏のわかりやすい佛教入門を連載します、御期待を乞ふ。(龍海)

○碧空に入道雲の柱の聳える季節。少年の日の回想の、最も盛んなる季節。收穫の秋にそなえて力をためる季節。皆さんお變りありませんか。

○無警告に無辜の多數の市民の生命を一瞬にして奪つた原爆は其意味からしても史上空前のものである。しかしリメンバーヒロシマという敵意の言葉より、ノーモア・ヒロシマの悲願の言葉を通して、我々は育つて行きたい。

○八月號も、おかげと読みどたえのあるものばかり。吉田先生はいつも御好意を頂いて有難い。京の

○武田氏は御忙しい所、特に本號に大島先生追悼の文をお書き下さった。先生の教を受けた會員諸氏も多く、懐しんで頂けると思う。

○秋には、世界佛教徒會議も開かれるそうです。思想と信仰を通じて手をつなぐことは、何と楽しいことでしょう。(竹中)

○世界狀勢の云々は敢えていいません。暑い夏、自ら自分の體をもて餘ますのが偽りのないところ。是非共、己れの心を見詰めることを以つて、秋に開かれる思索の時にそなえて下さい。

店舖新築記念大特賣

一、在家用 佛壇佛具一式

(正札の
一割引特賣)

一、寺院用 佛具一式

入荷豊富、御來談を乞ふ

東京都江東區深川三好町一ノ五長專院内(區役所前)

正本堂佛具店

念珠司

岩田圭秀商店

東京都豊島區巢鴨二ノ五〇
(とげぬき地藏うしろ染井靈地入口)

F・F・D 幻燈機

○映寫機 (ふつう映寫機と同じ性能)

ミナシキ……一二八八〇圓 送五〇〇圓
マスター……一一八八〇圓 送五〇〇圓

○スライド (フィルム)

各卷三、四〇〇圓程度、數百種カタログ進呈、

○本會代理責任取次

維持會員芳名(敬稱略)

慈教 寺(北海道)
栗原 光次(埼玉)
鈴木 平(埼玉)
渡邊 良子(東京)
新井 敬貴(埼玉)
以上四名、鴻巣勝願寺様紹介
誌上厚く御禮申し上げます。

誌代 會費半々年二百圓、一
年四百圓(千共)。毎號定價三
十圓千四圓、前金切次第清算
通知申上げます。確實便利な
振替を利用して下さい。

「浄土」 八月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和廿七年七月廿五日印刷
昭和廿七年八月一日發行

(定價三十圓)

編輯兼 眞野正順
發行人 眞野正順
印刷人 春山治部左衛門
東京都千代田區神田區保町
印刷所 共立社印刷所
東京都港區芝公園五ノ二〇
發行所 法然上人鑽仰會
東京八二一八七番
電話・芝(四三)一三二八